

広岡浅子

明治日本を切り開いた
女性実業家

小前亮

潤野炭鋳参入

NHK朝の
連続テレビ小説

『あさが来た』

ヒロインのモデル

加島銀行設立

大同生命創業

日本女子大学
創設

波瀾万丈、

明治女子の生涯!

広岡浅子

明治日本を切り開いた女性実業家

小前亮

星海社

72



SEIKAISHA
SHINSHO

廣岡淺子刀白

宿痾重つて

東京に逝く

大阪加島屋の女主人廣岡淺子刀白は昨年春以來健康を害ひ兎角病床に親しみ勝ちで舊臘十九日から宿痾の醫院炎でトツミ床に就き麻布野木町の家にて療養しつゝあつたが十四日午後八時病體に革まつて瀕死に至り、白玉棺の中の人となつた享年七十一。昨朝大阪から男忠三氏上京して喪を發した程で、まだ葬儀の日取は明かでないが無論キリスト教式によつて四五日中に執行される筈。

男勝りの女性

女子教育に貢献

淺子刀白は三井高修氏の叔母で廣岡家に入つてより孤獨の夫を助けよく加島屋の経営を完うせしめたる所謂男

一代之女丈夫なる
廣岡淺子女史は十四日午後八時、麻布野木町六三の別邸に於てかねての腎臓炎に心臓麻痺を併發して安らかに眠るが如く逝かれました。右に就いて十五年間の長日月の間女史から

廣岡淺子女史逝く

三井家の産せる偉大の女性
日本女子大學校創立の榮譽

せめて日本の婦人達が逐ける廣岡女史の高潔なる人格を學びて、其の感化に浴し、其の遺賢の遺芳を承継するものが出来ぬやうになつたならば、當に自己の周囲の光となるのみならず、國家と人道とに貢献すべし。此の婦人界に於ける所が多いと思ひます。(露井)

△娘の如く

來た小橋三四子さんは昨夜通夜されたさうで悲痛の涙を浮かべながら語られました。「私は十二日の夜廣岡さんから喉症のお招きに応じ、て参陣いたしますが、廣岡さんは

△其の夕方

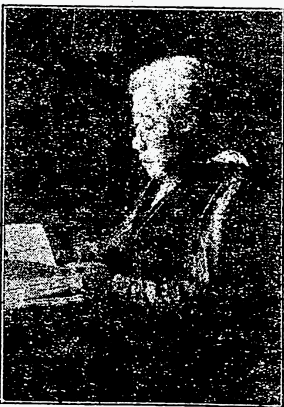
ひたいから来てくれぬか」この電語が驚りましたけれど、私は十三日は終日忙しくありましたのに、ホンの例のたゞ話に來いこの御心

△六十一歳

の時に、誠にならぬか、最近三年女史は健康を害されて夏期は御殿の別荘に同じ日の野原上を招待して神樂上の談話を熱心に

△大學卒業

當時に小松町四三の自宅で訪問の記者に「女子が青年活氣の男生徒に英會話を仕込むのですから可なり困難です。煩悶つて生徒を心から敬服させねば到



史女子淺岡廣るけ逝

藏氏の日本女子大學校創立の相談を文名を傳されましたが昨今は更ら

勝りであるつた、一統の命懸かめ子に宿を迎へてより餘力を女子教育に盡ね今の目白の女子大聖庭に際して少みらぬ助力を興へたが十年前返唇の歸に新たに宿の世界に留めた、それ迄は物質の世界をのみ眺めておた眼を惹いて自らを省みかる事に努めた其後二年乃自六十三歳の時洗禮を受けてキリスト教徒となつて昨年来以來著つた健康の本復し切らない身を以て強學理的にキリスト教を研究し求めらるれば諸報に立つて後輩を刻へ夏期は船岡原の二ノ丘に赴いて静養中も捺慮らずに遺を脱し私に遺言はしない、平常言ふ事が皆遺言であると言つてゐた相である

折から愛られたスズメネス女史盛んに支那問題や一般の社會問題などに就いて語つてゐられましたがその語調も態度も全く病臥してゐる方とは思はれぬ迄に

△元氣旺盛 でした。

登十三日丁度西園寺新子夫人が出席されました日の朝も廣岡さんは新子夫人の出發を見送れぬから私にその近著なる二週二倍に渡さ

であらうと、忙しくて参れぬし有の益を正直に申上げてお断りしなさいが、今になつて思へば、ホシに其時御目になつたらなかつたのが残念で堪りません

△廣岡さん の御陰謀

ですか、それは此間の二週一僱を御讀みになればお解りになりませうが、嘉永二年京都出水の三井家に生れ、十七歳の折大阪の富家

疑かれ、社會上や國家の問題にのみ頭腦を働まして、少しも自己いふ暇は有たれぬ方でした。

△遺言は別 にありませんが、私の日頃がその遺言であるといはれ、登の上では死に度くないと申されても、私には申せられませんでした

女史の死像は大石のやうに美しくいかにも安心立命した人の死であることが想はれます。遺族は長男重三氏か、子夫人との間に二男四女の令孫あり葬儀の日は現今議中にてまだ決定せぬ由

底敬壇の人と云ふとは出来ません**△厳しい中** にも親切を以て生徒に接する考へです

の二年三四年を撤去することになつて居ります一週に千時間です

が今語の練習は日本語を讀んで見ますから初つから英語でやつてます

ることにして居ます

からなる例へ合宿もブラックチカル云つた風にやります併し結果を見ない中は朝も申上げることはできません一云々



水戸部茂野女史

廣岡淺子刀自逝

加島屋の家靈骨を支へた
女傑傳中の第一人者

女傑傳中の第一人者ともいふべき大阪加島屋の女主人公にして加島銀行頭取廣岡三氏の養母廣岡淺子刀自は昨春來健康を損し病床に親しみ勝ちの所漸願十九日より病の體衰となり東京麻布村木町の邸に於て病中なりしが十四日

午後八時病臥かに華まり遺囑として遣行り享年七十二、永眠三日の日曜日には葬儀中の米親女夫人博士フアーネス女史の訪問を接待安樂齋子に宛り女史と長時間支那問題その他につき議論を交へ氣散る高かりしといふ、十五日朝より三氏上京して喪を發し、廿一日葬儀の日は基督教式による

後、社會上や國家の問題にのみ頭腦を働まして、少しも自己いふ暇は有たれぬ方でした。

疑かれ、社會上や國家の問題にのみ頭腦を働まして、少しも自己いふ暇は有たれぬ方でした。

疑かれ、社會上や國家の問題にのみ頭腦を働まして、少しも自己いふ暇は有たれぬ方でした。

出典…上『東京朝日新聞』
右『読売新聞』、左『大阪朝
日新聞』（すべて1919
年1月16日朝刊）

はじめに

死亡記事が語る人生

大正八年（西暦一九一九年）一月十六日、新聞各紙は十四日の夜に亡くなったひろおかあさこ広岡浅子の訃報を伝えた。

見出しにいわく、

「男勝りの女性、女子教育に貢献」（東京朝日新聞）

「一代の女傑逝く」（東京日日新聞）

「加島屋の屋台骨を支えた女傑伝中の第一人者」（大阪朝日新聞）

各紙はゆかりのある人物のインタビューなどを交えて、故人の業績を記している。簡潔にまとめると、次のような内容だ。

三井家みついに生まれて広岡家かじまや（加島屋）に嫁ぎ、銀行や炭鉱の経営に手腕を發揮して、傾きかけていた加島屋を支えた。また、日本女子大学設立に大きな貢献をなし、女子教育の普及にも努めた。晩年にはキリスト教に入信して、講演活動などを通じて後進の指導をおこなった。

事業に成功し、文化にも貢献し、精神的にも充実していた。非の打ちどころのない、立派な人生だ。その辣腕らつわんぶりは国境を越え、「日本の女流銀行家」としてアメリカの新聞でも紹介されていた。

告別式の様子も記事になっているが、東京でおこなわれた式には約千五百人、大阪には約千人の参列者があったという（『中外商業新報』）。媒体によって参列者数は異なるが、いずれにしても、しめやかに、などという定型句がおいそれと使えないくらいの規模である。それだけ影響力のある人物だったのだ。

栄光の陰に中傷あり

浅子はよくも悪くも声が大きく、目立つ人物だったから、批判もあった。いや、批判は多かつたと言つてよいだろう。

浅子と縁の深かつた大隈重信は、彼女の人格と才能を褒め称えつつ、「一部分の人からは多少誤解も受けました」と述べている。褒めている文脈だから、抑えた表現になっているが、実際は「多少」どころではなかつた。

日本女子大学で学んだ平塚らいてうは、大学の恩人たる浅子を押しつけがましくて不愉快だと評している。これは口の悪いらいてうの言葉だから割引が必要だが、同時代の浅子の印象からかけ離れてはいない。

皮肉の効いた短文で知られる薄田泣菫の新聞連載コラム『茶話』には、浅子が何度か登場する。西洋かぶれで説教好きの太ったおばさん、とカリカチュアライズされて、失敗を繰り返かえす。

こういったコラムは、読者が知らない人物だとおもしろい話にはならない。風刺漫画のようなものだから、今なら、大臣クラスの政治家とか、巨大IT企業の社長とか、実績のあるスポーツ選手とか、有名芸能人とかがネタになるだろうか。つまり、誰でも知ってい

る実力者ゆえに、欠点をあげつらわれて、笑い話にされるのだ。

しかし、こうして表に出ている部分はまだまだましである。残念なことだが、男女平等の思想が当たり前となった現代においても、活躍する女性に対する中傷は少なくない。ねたみそねみはどうしても出てくるし、他人に自分の理想を押しつける輩やかは絶滅しないものだ。それが、女性には参政権すらない時代であれば、どのようであったか。容易に想像がつくだろう。

浅子には実際に、強引で押しつけがましいところがあった。その性格は実業界で成功した一因であっただろう。だが、それ以上に誹ひ謗ぼ中ちゆう傷しょうを受けていた。浅子は生涯を通じて、逆境で戦っていた人でもある。

なぜ無名だったのか

新聞にはくわしい訃報が掲載され、コラムの題材になるほど、知名度の高かった人物なのに、現在では広岡浅子はあまり知られていない。ドラマの主人公のモデルになるまで、名前を聞いたことがなかった人が大半だろう。

その波乱と教訓に満ちた人生たるや、子供向けの伝記になってもおかしくなくらいな

のに、どうして忘れられてしまったのか。

日本では評価されにくい実業界の人物ゆえだろうか。明治期の実業家で現在でもよく名を語られるのは、渋沢栄一や岩崎弥太郎といった超大物にかぎられるから、その点では納得できるが、浅子の功績は実業家としてのものだけではない。

あるいは、貧乏を克服したとか、病気で早世したとかの共感しやすいエピソードがないから？ 浅子は富商の家に生まれており、ほぼ天寿をまっとうしている。野口英世や樋口一葉に比べると、感情に訴える部分は少ないかもしれない。

しかし、もったいない。こんな人を埋もれさせておくわけにはいかない。

新聞記事のような短い紹介だけでは伝わらないパワーが、浅子にはある。時代背景から、つい「珍しい女性実業家」などという視点で見えてしまいそうになるが、そのスケールは男だとか女だとかいう枠にとどまらない。とてつもなく器の大きい人なのだ。

洋装と炭鉱とピストルと

浅子を語る時、必ずといっていいほど引用される逸話がある。

機能的な洋装に身を包んで、炭鉱開発の現場に乗りこみ、荒くれ男たちの仕事を監督し

ていたというものだ。護身用にと、懐ふところにピストルを忍ばせていたという。

むさ苦しい男たちの仕事場に貴婦人がさっそうと現れ、矢継ぎ早に指示を飛ばす。その気品と迫力と、服の下で握りしめられたピストルのふくらみが、反抗的な男たちを黙らせる。実に絵になる。まるで映画のワンシーンのようだ。

だが、朝のドラマで正確に再現するのは難しいだろう。労働関連法のない時代の炭鉱は、歴史上でも稀まれに見るほど劣悪な労働環境だったから、とても映像では見せられない。

狭い空間は蒸し暑く、空気がよどんでいる。とぼしい灯りのもと、不自然な体勢でつるはしをふるい、石炭を掘り出しては運ぶ。身体はおろか、肺の中まで真っ黒にしての肉体労働は長時間つづく。岩盤の崩落や地下水の噴出、爆発事故など、死の危険とも隣り合わせだ。

労働者は食いつめた小作人が多く、囚人を強制労働させていた例もあった。暑いし、汚れるし、じやまになるので、男も女も服装は半裸が基本だ。はったりのために刺青いれずみを入れる者が多かったという。

石炭は産業革命期の世界を照らすエネルギー源であったが、炭鉱の労働環境は産業革命の闇であった。男だろうが女だろうが関係ない。上流階級の人間が顔を出す場所ではない

のだ。

浅子が監督したのは新しい坑道の開発だから、多少は割り引いて見るとしても、雰囲気は大きく変わらないだろう。爆薬を使うので、事故の危険はなお高い。

しかも、そういう現場で仕事をしながら、浅子は女子教育についての書物を読み進めていたのだ。

これこそ、変革期の英雄に見られるバイタリテイではないか。

時代背景とともに人物を語る

広岡浅子はこれまで、断片的ではあるものの、様々な研究分野から語られてきた。江戸時代の大坂商人の延長線として、明治期の企業経営者として、女子教育及び思想史のなかで、生命保険業の勃興史のなかで、そしてキリスト教団体の活動とともに……。あまりに多面的な活躍が、一冊の伝記を書くのを難しくしていたのかもしれない。

本書は、おそらくはじめての浅子の本格的な伝記となる。公開されたばかりの成瀬仁蔵なるせ じんぞう宛の書簡など、最新の史料を使いつつ、浅子の一生と業績を紹介していく。その際、背景となる時代や地域についても、可能なかぎり紙幅をさきたい。

たとえば、同じ事業を興すにしても、明治時代と、平成の今では、まったく勝手がちがう。どちらが難しいかという話ではなく、前提条件があまりに異なるので、比較がしにくいのだ。現代の感覚で理解しようとしても、ずれが生じてしまう。

東京と大阪を頻繁に行き来して、精力的に経営をおこなっていた——現在なら、特筆するにあたらぬ。そういう実業家は大勢いるだろう。だが、明治になると話がちがう。飛行機も新幹線もないから、移動には時間がかかる。緊急の連絡は電報がメインだ。当時はそれが普通だが、現代人が想像するとげんなりしてくるにちがいない。

逆に、明治時代も思ったより遅れていない、と感じることもあるだろう。国際経済の流れなどは意外に現代との差異が少ない。

あらためて冒頭の死亡記事にもどってみると、故人の業績を短くまとめ、写真を載せ、関係者にインタビューして……と今の新聞とほとんど構成が同じである。電子版が出る世の中になっても、内容はそうそう変わらないのだ。

そういった部分があるべく感じとれるように、書き進めていきたいと思う。

歴史上の人物、とくに政治史以外で活躍した人物の伝記を書くとき、個人にだけ焦点を当てていては、本当の魅力は伝わらない。いつ、どこで生まれ、どのように育ったのか。

周囲の環境や時代の変化が人に与える影響は大きい。現代の価値観で理解しようとする、一面しか見えなくなってしまう。

浅子と近い時代の偉人で考えてみよう。ポーランド生まれのキュリー夫人はどうしてフランスで研究していたのか。キュリー夫人の人生には、大国に翻弄ほんろうされるポーランドの哀史と、根強い女性蔑視べっしが色濃い背景となっている。

国の歴史だって、一国だけ見ていては気づかないことが出てくる。黒船を送って日本を開国させたのはアメリカだ。なのにどうして、その後、積極的に貿易をしようとしなかったのか、幕末の混乱期にちよつかいをかけてこなかったのか。

歴史は前後左右を見て、立体的にとらえることが重要だ。時代の流れの中に位置づけ、ほかと比較すれば、より正確な像が浮かびあがってくる。

逆に、人物の理解は時代の理解につながる。浅子という傑物の一生を追うことで、明治日本の概要を知ることができる。

明治というのは熱い時代だ。革命が起こって新体制が樹立され、人々は希望に燃えていた。未来は明るいと信じ、それに向かって努力していた。後世から見れば、まちがった努力もあったかもしれない。でもだからといって、人々の思いを否定することはできない。

未来を信じて、いい国を、いい社会をつくろうと思って努力する。それは現代に生きる我々が忘れてしまった情熱かもしれない。

浅子は人を育てようとしていた。国と社会の役に立つ、有益な人材を送り出そうとしていた。よりよい未来のためだ。その思いが多くの人に伝わるように願っている。

目次

はじめに 5

死亡記事が語る人生 5

栄光の陰に中傷あり 7

なぜ無名だったのか 8

洋装と炭鉱とピストルと 9

時代背景とともに人物を語る 11

第二章 江戸時代の加島屋と浅子の誕生

27

浅子の肖像 28

鴻善と加久 33

加島屋の創業 37

米を金に 40

ハイリスクハイリターンの大名貸し 42

越後屋呉服店と三井家 45

京に生まれる 49

変革の足音 51

第二章
幕末の動乱と浅子の輿入れ 55

花嫁稼業は嫌い 56

勉強好きでおてんばなお嬢様 57

風雲渦巻く 63

都が炎の海に 66

輿入れの日 74

薄幸の異母姉 77

この夫がいてこそ 79

江戸幕府滅亡 85

第三章 産業革命の明治と浅子の奮闘

97

三百万両の御用金 98

銀目廃止で大混乱 102

第二の革命 103

加島屋の危機に浅子が立ちあがる 107

藩邸の一夜 110

政商三井 112

コラム 「大阪商人の天敵」 116

外国資本は入れない 118

産業革命に向けて 119

新しい時代の大阪商人 122

浅子の石炭事業 125

石炭輸送から炭鉱経営へ 127

加島銀行 129

妻の無能力 131

尼崎紡績 あまがさき 132

日清戦争の功罪 134

いざ、炭鉱へ 136

コラム 「三井三池炭鉱」 141

第四章 女子教育と生命保険業

145

運命の出会い 146

女子教育の父 147

明治の学校教育制度 151

女子大設立に向けて 154

最強コンピの説得術 160

念願かなう 162

コラム 「日本の私立大学」 168

従業員にも教育を 173

浅子の人材登用と評価 175

あなたの夫であれば 179

コラム 「明治時代を彩った女傑たち」 181

循環する景気 186

悲願の条約改正 188

生命保険業へ 191

仏教系生保を買収 193

大同生命の誕生 195

コラム 「浅子の趣味」 198

第五章 キリスト者として 201

浅子のホーム 202

最良の後継者 205

日露戦争と浅子 206

洗礼を受ける 210

コラム 「ヴォーリスと広岡家」 215

コラム 「広岡家の家族写真」 218

後進の指導 222

軽井沢にて 223

二の岡が育てた女性たち 225

浅子の言葉 228

おわりに
236

社会のために
236

恐慌に消えた加島銀行
238

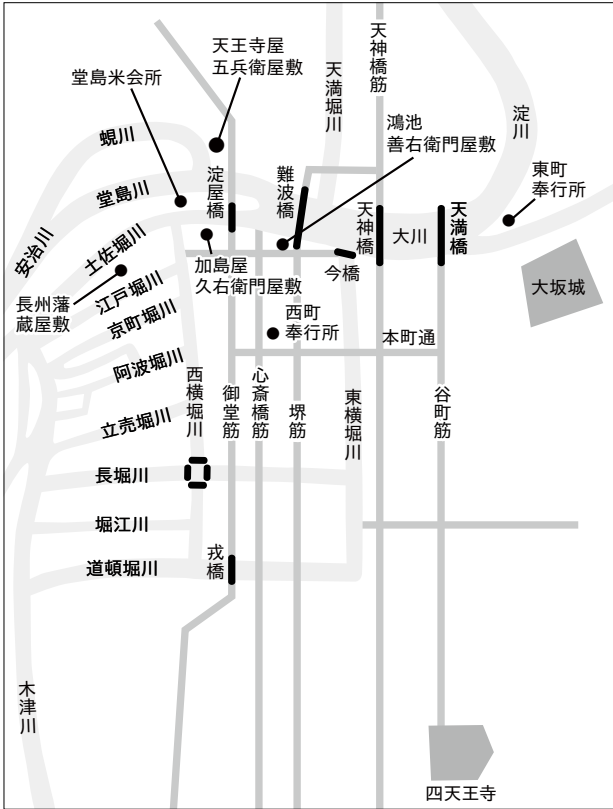
大同生命の今
239

あとがき
242

〈関連地図・京都〉



〈関連地図・大坂〉



引用に関する凡例

- ・引用に際しては、旧字や旧仮名遣いを適宜改めた箇所がある。
- ・ルビについても、適宜補った。
- ・なお、意訳を施した場合は当該部分にその旨を注記した。

第一章

江戸時代の加島屋と浅子の誕生

浅子の肖像

江戸時代以前の人物だと、容貌や体格は絵や彫像でしかわからない。それらは写実的であるとはかぎらないし、誰を描いたものかはつきりしない例も見られる。

たとえば、昔の教科書には当たり前のように載っていた源頼朝みなもとのよりともの肖像画は、今では別人を描いたものだという説が有力になっている。

その点で、明治以降はありがたい。有名な人物はたいがい写真が残っているの、容貌がはっきりとわかってイメージがつかみやすい。

例外といえば西郷隆盛さいごうたかもりで、おそらくは暗殺を怖れて、まったく写



浅子晩年に近い時期のものと思われる一枚。実業家となった後のものは洋装の写真が多い。提供：大同生命保険株式会社

真を撮らせず、肖像画も描かせなかった。現存する絵や像は本人の姿を写したものではなく、あまり似ていないという。

広岡浅子については、少なくない数の写真が残っている。

カメラの前の浅子は、洋装であることが多い。現役だったころの押しの強そうな写真も、一線を退いてからの少し穏やかな写真も、ともに気品と生命力にあふれている。名家のお嬢様というよりは、やりての女社長といった雰囲気だ。

同時代の人の目にはどう映っていたのだろうか。

明治三十三年（西暦一九〇〇年）に発行された評伝は、浅子の容貌や服装について、次のように記している。少し長いがそのまま引用してみよう。

「……今年五十の坂を二ツ三ツ越した許りで女流としては先づ巖丈作りで若い頃より中年迄は随分体格が肥満して居つたそうだ。元来性質が女々しい方ではないから随つて振りや身装は一向に構はず、頭髮は自分でグルグル巻きにして、衣服も綿服こそ着ないが是が加島屋の御寮人さん（大阪の方言で奥さんの意味）かと疑ふ程の質素な風である。尤も公やけの場所へ臨む時には重に洋装であつて中々立派なもので、特に

初めて会ふものが第一に気が引けると云ふのは其炯々たる眼光であつて、又肩を怒らし大股で歩み、丸で男の様である……(引用)

原文ママ、以下同) (『名流の面影』)

さすがに写真を撮る時は服装を整えているが、普段は良家の奥様とは思えない質素な出で立ちであつたようだ。髪を自分で巻くというのは、当時の貴婦人としてはかなり珍しかっただろう。それにしても、男勝りの貫禄と、人をたじろがせる鋭い眼光が目には浮かぶようである。実業家・広岡浅子の武器は押し出しの強さ、迫力と弁舌であつた。別の評伝に、その弁舌が巧みに表現されて

初めは夫人なり、實業家として地位に令兄次郎氏あるのみならず一機の飛躍となり常に流れを風さるる手腕の程潔しとや謂はん、故に一方よりは多少夫人を思ふ戀ふもの由て来るも自然の數として極むに足らざるべし

家庭は嚴し(〇〇の事)

是れ實業に盡しし氣質の先せやらず、夫人が常に家庭の嚴格を以てたむと爲せる結果なるべし、但し其間の親戚が或は實際の形ある故か、現角夫人には結婚の希望が燃立つことあり、爾するものあるは夫人の爲めに氣の毒とこそ申す可けれ

加島加高屋浅子

初木徳の殿にして餘り世人の耳に入らぬ無名の女傑とも云ふべき夫人を紹介しよう、それは大股で歩み、丸で男の様、相並んで五郎殿と稱せられた加島加高屋の分家加島五郎氏の夫人御子である、日本の女流社會では少くなく氣風が纏つて世間から罵や角の批評を受けるのが普通でない、此淺子も亦別辭りと言はれるが從來隨分大股三界で響の々非難もあるやうだが、併し其の事業と性行とを吟味して見れば中今世にも恐しいエラい女流であつて、將來の日本婦人の模範とも爲す可き事蹟が輝出ある

其略歴

先づ其世系を二口に申さうならぬのが右川の三井三郎助氏は其實業、此三井家より右の加島屋(輝)してからは本家加島屋の權階に於ける財政の難題を運むるが、あつたのも夫人であつて、爾來文明の風潮が實業界にも打ち寄るやうになつて来たから夫人は此際今の世は何事も文明的でなくてはならぬとて加島屋一家親族が山脚事業として先か加島大反置したるにも拘はらず、餘金と利を以て九州筑前豊前郡明時の炭田を買占め其事業經營として甲斐／＼しくも敏達に事務員工夫等と錢を共にして働いたが、これ等は夫人の卓見であつて其進取の氣概に富みたる、實業家の酒々たる女流に秀

でたるのみならず、實に五尺の男子も及ばざる一傑である

風采言語

今年五十の歳を二ツ三ツ終りた許りで女流としては先づ絶頂期で若い頃より中年迄は強健格が肥満して居つたそうだが、元來性質が女々しい方でないから随つて振舞ひ身装は一向に粗はらず、頭髪は自分でケル／＼巻かして、衣服も縮服こそ着ないが是が加島屋の御家来、大股の女であり與さん(眼)さんか足も縮の縮な女風である、尤も公やけの場所へ臨む時は重に洋服であつて中今立派なもので、特に初めて會ふものが第一に気が引けると云ふのは其炯々たる眼光であつて、又肩を怒らし大股で歩み、丸

佐瀬得三『名流の面影』(春陽堂、1900年)より、浅子の章。子の當時はまだ「無名の女傑」と書かれているのが興味深い。

「……話ッ振りは宛ながら青竹を二ツに割つた様、相手の顔色を窺つて物を言ふとか、よい加減に調子を合せるなぞということは、如何なる人の前でも断じてない。日本人では男子ですら多く言ふことの出来ない『否』と『然り』が極めて明快。平常は忙しい身体で、多くの余暇もないせいであろうが、話しは単刀直入相手の顔を見るとき屹ッと容を正して、いきなり『さて御来意は?』と吹き懸けるといふ調子、そして話しが一寸気に入ると、出るわ出るわ、漢語でも英語でも、時勢論でも経済論でもものべつ幕無しに出て来る有様は宛ながら懸河の弁、まごまごしていようものなら忽ち言ひ捲られ、叱り飛ばされ、吹き倒されて組み敷かれて了ふのである」(『実業

之日本』第七卷一号「本邦実業界の女傑」)

浅子は誰に対しても臆することなく、強気の交渉で意を通した。「日本人はイエス・ノーがはつきり言えない」とは、明治の昔から現代に至るまで語られる評価だが、浅子には当てはまらない。ダメなものダメ、いいものいい。とにかく明快だ。

英語や漢語が出るのは、読書の成果である。浅子は学校に通つたことがなく、すべて独

学で、漢文や英語の書物を読みこんでいた。それらを駆使して、会話のペースを握るのである。

この評伝は大げさではなく、浅子の交渉力は天下にとどろいていた。

明治三十三年、井上馨いのうえかおるに宛てた益田孝ますだ たかしの書簡に、その証拠が残されている。井上馨は長州出身の政治家で、外務大臣や大蔵大臣を歴任し、三井物産の基礎をきずくなど、実業界に強い影響力を持った人物だ。一方の益田孝は三井物産の初代社長で、明治期の海外ビジネスを先導するとともに、三井財閥を育てた実業家である。ふたりはいわゆるズブズブの関係であり、現代では問題になるだろうが、近代化の過程ではそういう政財ゆちやくの癒着ゆちやくが必要悪としてあった。

当時、三井銀行は資金が乏しかったので、貸し出しの審査を厳しくしていた。そのため、井上が紹介した人物も融資を断られてしまった。井上は益田に、何とかしてやれ、と依頼する。益田が答えていわく、

「申し訳ございません。なにしろ資金不足で、大阪の広岡家への貸し付けも断っているくらいです。広岡夫人は大変な剣幕で、他の方に貸したら承知しない、と仰っ

ておりました。ご紹介の方は大阪の人だそうですから、ここで話がもれるかわかりません。困ったことになりますから、なにとぞ今回はご勘弁を」〔三井文庫論叢〕16号「井

上馨宛益田孝書簡」より意訳

浅子にすら貸してないのだから、貸すわけにはいかない。ばれたら大変なことになる。と益田は言ったのである。浅子は言い訳に使われたのかもしれないが、それも辣腕ぶりが知れわたっていたからこそだ。

このような評判を得るまでに、いかなる困難を乗り越えてきたのか。気になるところではあるが、ここでは、浅子の生い立ちを語る前に、まずはその嫁ぎ先である広岡家（加島屋）と出身である三井家の歴史をたどってみたい。

鴻善と加久

木村拓哉をキムタクといい、松本潤をマツジュンという。こうした通称は最近の風潮ではなく、古くからの伝統である。江戸時代の大商人に、そういった例が多い。

みかん売買で財を成したという伝説で知られる紀伊国屋文左衛門は、「紀文」と呼ばれて

いた。上方では、「鴻善」「加久」という商人が有名だった。「鴻善」こと鴻池善右衛門は酒造業で身を起こし、大名貸しで巨利を得た豪商だ。そして、「加久」が加島屋久右衛門、姓は広岡で、浅子の嫁ぎ先の商家である。

鴻池屋の善右衛門、加島屋の久右衛門は代々の当主に受け継がれる名前であり、「鴻善」や「加久」は人名であると同時に店名の意味合いも持つ。

「鴻善」と「加久」は、江戸時代の後半、大坂で一、二を争う大店であった。この時期、幕府は公共事業や経済政策に際して、御用金という名目で有力な商人に費用を負担させていたが、もつとも多くの金を出していたのが、この両巨頭だった。

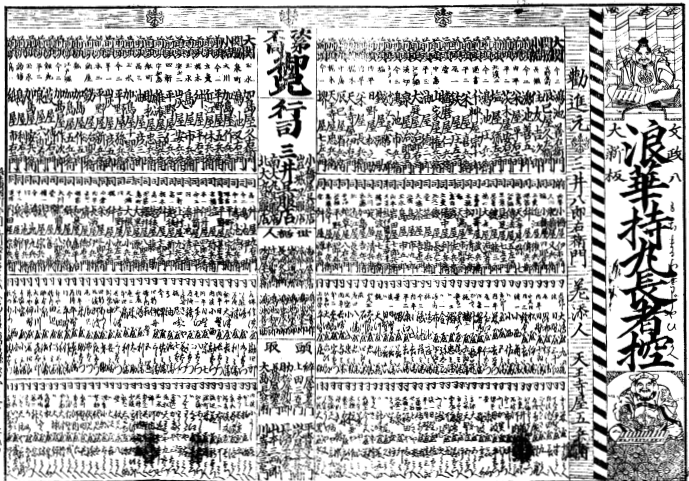
文化三年（西暦一八〇六年）には、米価を引き上げるため、大商人に命じて米を買わせる買米令が出されているが、「鴻善」と「加久」は最大の三万三千石を割り当てられた。天保十四年（西暦一八四三年）には、両家は十万両の供出を求められ、さらにこうした御用金のとりまめを命じられている。このときは窮民救済のためという理由であったが、実際に救済されるのは幕府の財政だ。

また、天保二年（西暦一八三一年）から三年にかけておこなわれた川ざらえ（川底にたまった土砂をとりのぞいて、船が通れるようにする工事）では、両家は千三百両ずつを上納した。ちな

みに、このとき川からさらわれた土砂を積んで造られたのが、日本一低い山として有名だった天保山である。

このような御用金は商人にとって忌々しいものであったろうが、富裕層にかかる臨時の税金という性格もあって、社会の維持には必要であった。また、店の序列に応じて負担額が決められるため、多額の賦課は名譽だとも言える。

その序列をしめすのが、長者番付だ。様々なランキングを大相撲の番付に見立てて発表する。〇〇番付は、昭和の時代まで盛んであった。また、二〇〇六年までおこなわれていた高額納税者の公示は、俗に長者番付と呼ばれていた。これらは江戸時代までさかのぼる。日本人のランキング好きは筋金入りなのだ。



浪華持丸長者控。行司が三井呉服店、差添人が天王寺屋五兵衛になっているのも、当時の認識を知る上で興味深い。提供：大阪市立中央図書館

塩屋三喜長衛門

文政八年（西暦一八二五年）の長者番付大坂版を見てみよう。

江戸時代には横綱の地位は制度化されていないので、大関が最高位になる。東の大関が「鴻善」、西の大関が「加久」と並び立っているのがわかるだろう。今二、玉水といのは店のある地名で、^{いまばし}今橋二丁目、^{たまみず}玉水町のことだ。

この長者番付を眺めていると、もうひとつ、鴻池や加島屋、平野屋など、同じ屋号が複数出てくるのに気づく。分家やのれん分けの結果だが、こうなってくると、加島屋といつてもどの加島屋かわからなくなる。「鴻善」「加久」の略称はどの店か区別するためでもあった。

ちなみに、西の小結にあげられている加島屋作兵衛は長田姓で、広岡姓の「加久」とはルー



大関に加島屋久右衛門、前頭に加島屋五兵衛の名がみえる。小結の加島屋作兵衛は長田姓で、広岡家とは別系統である。提供：大阪市立中央図書館

ツの異なる別の家だ。店は近く、商売も同じ大名貸しで、屋号も同じ、絵に描いたようなライバル関係にあった。どちらも、「加島屋」の元祖は自分たちだと言って張り合っていたという。

加島屋の創業

天下の台所と称された大坂で隆盛を誇った加島屋は、どのようにして生まれ、どうやって商売を広げてきたのか。

加島屋に伝わる系図によれば、広岡氏の先祖は播磨はりまの守護大名だった赤松氏あかまつで、源氏につらなる家系である。もともと、鴻池屋やまなかの山中氏やまなかは戦国時代の有名な武将である山中鹿介しかのすけの、長田氏のほうの加島屋は後北条ごほうじょう氏の、それぞれ子孫だと称している。大坂の商人たちは、高名な武家に関連づけて、みずからの家系を権威づけていたのだろう。成り上がりの大名が、源氏や平家の末裔と自称するようなものだ。

加島屋の創業は寛永二年（西暦一六二五年）にさかのぼるといふ。

初代の広岡久右衛門とみまさ富政とみまさ（正教）が御堂前に精米業の店を開いて、加島屋と名付けた。大坂の陣で豊臣家とよとみが滅ぼされて十年、三代將軍家光いへみつが就任して、太平の時代がまさにはじま

つたころだ。徳川家によって再建中の大坂城が、店からよく見えたことだろう。

初代久右衛門がはじめた精米業というのは、わりと新しい商売である。室町時代までは米は玄米を炊いて食べるのが一般的だった。酒を造るときには精米していたが、杵と臼を使って糠ぬかをこすりとるので、時間と手間がかかる。足踏み式の精米装置の開発、都市への人口の集中、町人の収入の増加など、様々な条件がそろって、多くの人が白米を食べるようになったのだ。その結果、栄養不足になって、脚気かっけがはやりたりするのだが、それはまた別の問題である。

さて、初代久右衛門は精米業とともに両替業もおこなっていた。商売は順調で、三代目のときに玉水町に移転し、米問屋をはじめめる。現在



明治中期以降の加島屋を写した貴重な一枚。現在の大同生命大阪本社ビルと同じ場所にあたる。手前の川は西横堀川。提供：大同生命保険株式会社

の大同生命本社ビルがある場所だ。

加島屋の名は、今の大阪市西淀川区にあった加島村に由来する。貨幣の鑄造^{ちゅうぞう}で知られた村だったので、両替屋にふさわしいと、村の名を店名に用いたのだという。

と、この三代目までの事績は百科事典などには記してあるが、実ははっきりと裏付けられてはいない。

文化十五年（西暦一八一八年）に加島屋が店をあげて来歴を調べたところ、系図は初代久右衛門の父親まで、店の記録は元禄六年（西暦一六九三年）に玉水町にあったところまではさかのぼれた。それ以前のこと、つまり何年創業かなどは断定できなかったのだ。

調査のきっかけは、奉行所から「幕府のために尽くした加島屋に褒美^{ほうび}をつかわそう。ついでに店の歴史を調べてまいれ」と命じられたからだが、ずいぶんとまじめに調べたものである。

とはいえ、記録がないからといって疑っても仕方がない。現に店はあったのだ。ここでは、だいたい寛永年間（西暦一六三四〜四四年）の創業だと理解しておこう。

米を金に

加島屋をさらなる発展に導いたのは広岡の宗家（初代の兄の家）から養子に來た四代目である。四代目久右衛門は商才のある人で、堂島米市場の有力商人として、商いを広げている。どうしま

当時の堂島米市場は、世界でも珍しい先進的な市場であった。現物を用意せずに売買がなされ、先物取引があったり、空売りがあったりと、現在の株式市場のような取引がおこなわれていた。

精米、両替、米問屋、そして大名貸しへと事業を拡大していく加島屋だが、闇雲に手を広げていったわけではない。江戸時代の経済では、米と金には密接なつながりがある。その点に注目しつつ、加島屋の商売について説明しよう。

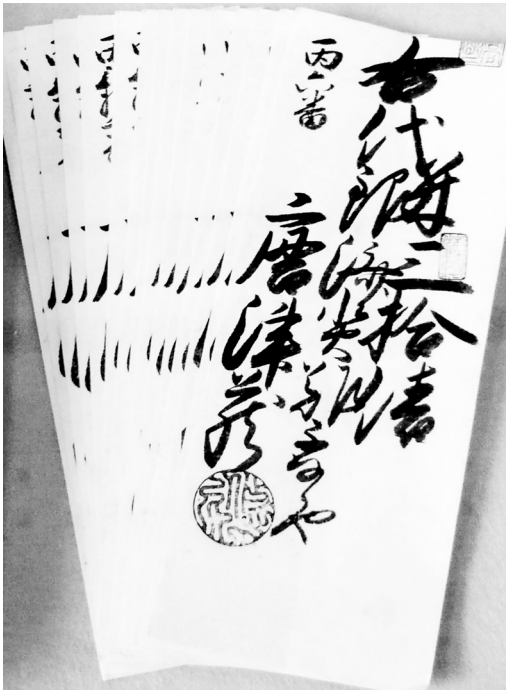
まず、貨幣に目を向けると、江戸時代には、金貨（小判など）、銀貨（丁銀など）、銭貨（銅製もしくは鉄製）の三種類が流通していた。庶民が使っていたのはもちろん銭だが、「江戸の金遣い、大坂の銀遣い」と言って、大名や大商人がおこなう高額の取引では、江戸では金貨を、大坂では銀貨を主に使っていた。つまり、江戸の商人が大坂で取引する際には、金を銀に替えなければならない。日本の会社がアメリカで取引するときに、円をドルに替

えるのと同じだ。

ここに、金銀の両替をおこなう両替商（本両替）の活躍する場が生まれる。多くの場合、現金ではなくて帳簿上のやりとりになるから、かれらは手形の発行や貸し付けなども手がけるようになった。金銀の両替には、幕府が定めたレートもあったが、実際には日々の需要で変わる変動相場が適用されていた。

もうひとつ、貨幣と似たような働きをするものがあった。それは米、より正確に言えば、最終的に米と交換できる「米切手」である。

江戸時代の諸藩の収入は大部分が年貢米だ。藩に納められた



唐津藩の米切手。加島屋から受け継がれた大同生命文書中のもの。

提供：大同生命保険株式会社

米は大坂の蔵屋敷に運ばれ、そこでお金に換えられる。直接売買されるのではなく、代金と引き替えに米切手が発行され、それを期間内に蔵屋敷に持ちこめば米と交換できるよう定められていた。

この米切手が売買の対象となったり、借金の担保となったりするのは、自然の成り行きだろう。米切手を金銀に替える両替を入替両替というが、加島屋は米市場との関わりから、この入替両替を主な業務として財を成した。本両替をメインにおこなっていた鴻池屋と異なる点である。

ハイリスクハイリターン大名貸し

こうした年貢米の流れを、藩の側から見るとどうなるだろう。

その年の年貢は、おおむね年末までに藩の蔵に集められる。そこから、大坂の蔵屋敷に運ばねばならない。東国の藩は江戸にも蔵屋敷をもうけて売買をおこなっていたが、将軍お膝元である江戸では、幕府の統制が厳しく、また旗本も米を金に換えるため、売れる量も価格も制限されてしまう。ゆえに、時間がかかっても大坂に運ぶのだが、遠隔地だと船を利用するので、一年以上もかかることがあった。

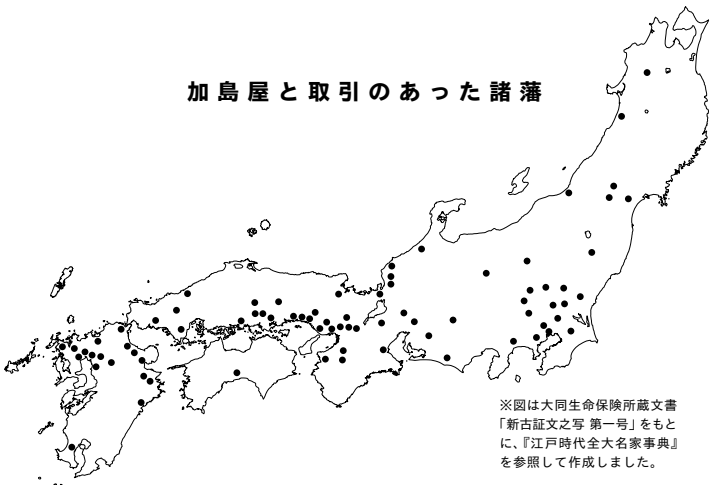
収入の柱が年一回の収穫で、しかもお金になるまで時間がかかるのだから、藩の財政運営はきつい。飢饉^{きん}だって少なくないのだ。

そして、支出の面でいうと、一年おきの参勤交代には莫大な費用がかかり、また江戸での生活には多額の金銭が必要になる。資金を融通してくれる商人がいなければ、立ち行かなくなるのも無理はない。

江戸時代のはじめ、大名に貸し付けをおこなうのは、京都の大商人が多かった。しかし、大坂が経済の中心としての地位を確立すると、大坂商人が一番の貸し手になっていく。鴻池屋と加島屋はその筆頭であった。

背景にあったのは、大坂商人たちの「金は遊ばせておいても一文にもならない」という思想

加島屋と取引のあった諸藩



加島屋の大名貸しは極めて大規模におこなわれており、取引のあった藩は、実に全国の三分の一にもぼる。原図提供：大同生命保険株式会社

である。もうけた金を蔵に貯めていても利子がつくわけではない。それどころか、盗まれたり火事に遭ったりで、失ってしまう危険は現代より格段に高かった。それなら、金に金を稼がせるべきだ。

では、大名貸しのリスクとリターンはいかほどであったか。

まず、リターンから説明すると、利子は年利換算で十パーセント前後だが、幕末に向けて諸藩の財政が窮乏きゆうぼうしていくとともに下がっていく。現代の感覚だと、苦しくなるほど借金の利率は高くなりそうだが、大名貸しの場合は、少額でもいいからとにかく払ってもらおうという考え方だった。利子のほか、武士と同じような扶持米が与えられており、鴻池屋は扶持米ふちまいだけで年間一万石の収入があったという。

リスクのほうは、まちがいなく大きい。大名貸しというのは、金の足りない権力者に貸すわけである。貸し倒れの可能性は高い。何かと理由をつけて返済をしぶり、踏み倒す藩は少なくなかった。蔵米が事実上の担保となっていたが、飢饉で収穫が少ない年もあって充分ではなかった。貸し手の商人のほうは、元金の返済は期待していなかったという。利子と扶持米が得られれば、それで利益が出る。

リスクが高いのを承知のうえで、豪商たちは大名貸しをおこなっていた。失敗して没落

する者も多かったが、生き残った者は利益が利益を生んで、さらに大きくなった。

成功する者たちはリスクを低減する努力をおこたらなかった。貸す前には徹底して下調べをおこなう。多額の借金申し入れに対しては、仲間を集めて応じる。人脈を駆使して返済が優先的におこなわれるようにする……。

加島屋では、藩に財政の計画書を出させて、融資の可否を検討していた。津和野藩への貸し付けの際は、和紙と蠟燭ろうそくという藩の特産品を販売した代金で返済する、との取り決めがあった。江戸時代も後半になると、各藩は儉約や商品開発で財政再建に乗り出す。その際、大名貸しをする商人たちがコンサルタントのようにアドバイスをしていたのである。「鴻善」や「加久」などの商売を見ていくと、まさに現代の銀行のような役割を果たしていたことがわかる。両者が明治維新のあとに銀行を設立したのも納得だ。

越後屋呉服店と三井家

三井といえば、かつての三大財閥のひとつで、財閥が解体されて久しい現在でも、その名を冠した企業は多い。三井住友銀行、三井物産、三井不動産を中核とする三井グループには、トヨタ自動車や東芝などの企業も含まれており、日本のみならず世界の経済界に大

きな位置を占めている。

三井が大きく発展して財閥へ成長したのは明治時代のことだが、江戸時代においてもトップクラスの豪商であった。

三井家の家伝によれば、先祖は藤原道長ふじわらのみちながで、中世には武士として近江の六角氏おうみろっかくに仕えていたという。事実上の創業者である三井高利たかとしは、元和八年げんな（西暦一六二二年）に商家の四男として生まれた。独立して江戸に呉服店越後屋を開いたのは、延宝元年えんぼう（西暦一六七三年）だから、五十歳を超えている。兄たちに才能を警戒され、故郷の松坂まつざかで母の面倒を見させられていたため、雌伏しふくの時



三井高利。元和8年（1622）～元禄7年（1694）。三井家の礎を築いた人物として著名である。提供：公益財団法人三井文庫

期が長かったのだそうだ。

兄たちの認識は正しかった。

……天井から吊り下げられた色とりどりの反物^{たんもの}。反物には値札がつけられており、奥には勘定場があつて、その日の両替相場が記されてある。広い店のあちこちで、客と手代が商談を繰り広げ、要望にしたがつて、反物が切り売りされる……

いまでは当たり前前に思える光景だが、当時、越後屋の商売は、それまでの商慣習をくつがえすものだった。御用聞きの訪問販売から、店先に商品をならべての販売へ。盆暮れのつけ払いから、現金販売へ。値段は交渉から、正札値引きなしの販売へ。まとめ売りから切り売りへ。

高利の考案した新商法は、江戸の町人に大いに受けた。一方で、同業者からはうとまれ、様々な嫌がらせを受けたという。

それでも、越後屋の勢いはとまらなかつた。高利は江戸、大坂と、仕入れ先である京都に店をかまえ、両替業にも進出した。一般の顧客に好評だった呉服屋と対照的に、両替業

はいかなかつたが、事業における大名貸しの割合は小さかつた。

京に生まれる

さて、いよいよ本書の主人公の登場である。

嘉永二年（西暦一八四九年）、京都油小路出水の三

井家に、浅子は生まれた。出水三井家は、高利の九男にさかのぼる本家のひとつだ。明治時代の東京の小石川こいしかわに引越して、小石川三井家と呼ばれるようになる。

浅子はその六代目当主・高益たかますの娘だが、妾腹であつたために、当初は三井家の一員とはされていなかつた。幼名ようみょうは照てるという。

数え三歳になつてから、七代目当主・高喜たかよしの義妹として、浅子は三井家に入家した。

學問よりも一家を持つて必要な職能、人に仕へる禮儀、夫、老人を養はせる遊藝を仕込むことを、主要なことでされて居りました。私もその例に洩れず、日々成績、茶の湯、生花、琴の稽古などを強ひられました。これより先き一歳といふまだ片言も云ひ初めぬ間に、早くも大阪の廣町家に許嫁の身となりました。これは當時重縁と云つて、縁家同志の結婚を喜びましたが、私のもこの重縁の爲めに、早く取定められたのでした。

徳川三百年の太平を夢みた日本も、維新の大改革を前に控えて、風雲たゞならぬ頃、一時諸大名は國事の爲め京都に多く入り込みました。家々は互に同居してこれ等の人々に居宅を興へなければならぬ事となり

私の家にも二の親戚を寄寓させるやうになりました。かやうな間にも私の兄弟や従兄弟等は、學問を一時も怠つてはならぬと、指導を受けて居りましたが、傍らに見て居る私は、女なるが故に學問は不要だと云はるゝのを、熱々残念に思ひました。それで人知れず四書五經の表紙に耳傾けては學問に非常なる興味を持つやうになりましたので、家人は大に心配して、嚴重な制裁を加へ、私の十三歳の頃讀書を一切禁ずるやうにと申渡されました。然し壓迫益々強ければ、これを打ち破らんとする精神は愈々固く、遂に家人同僚等も、同様の志が、いよいよ六頭理は無い、且つ學べば必ず修得せらるる頭腦があるものであるから、どうかして學ばせよものだ」と考へました。やう／＼物／＼道理を辨へる頃によつ

「嘉永四年二月、父高益の女（庶出）照を入家せしむ」（『稿本三井家史料』）

浅子の義兄となつた高喜は、三井本家のひとつ南家から養子に來た人物だ。浅子とは二十六歳はなれている。

後年、浅子は自伝において、

「……二歳といふまだ片言も云ひ初めぬ間に、早くも大阪の廣岡家に許嫁の身となりました。これは当時重縁と云つて、縁家同志の結婚を喜びましたが、私のもこの重縁の爲めに、早くから取定められたのでした」（『一週一信』）

と述べている。老年になつてからの回想であり、記憶が残つていゝるとは考えにくいから、そのまま受け取ることではできないが、広岡家への嫁入りを前提とした入家とみなしてよいだろう。当主高喜とは親子ほどの年齢差があるのに「義妹」とされたのは、次男で分家の養子になつた相手と格を合わせるためではないか。同じく、豪商への嫁入りを前提として

入家した浅子の異母姉・春は「養女」とされている。

当時、豪商同士の縁組はさかんにおこなわれていた。両家の絆を深め、資本力や信用力を高めるための政略結婚のようなものだ。

浅子が言うように、三井家と広岡家はとくに縁が深かった。近いところでは、浅子の伯母にあたるふきも広岡家に嫁いでいる。

変革の足音

ところで、浅子が生まれた嘉永二年（西暦一八四九年）とはどういう年か。

同じ年生まれの人物としては、内閣総理大臣を務めた西園寺公望、陸軍大将の乃木希典などがあげられる。西園寺は公家出身の政治家で、文部行政に通じており、浅子の生涯に深くかかわってくる人物だ。同じ年にごく近くで生まれており、どこかですれ違っていたかもしれない。

ときの將軍は第十二代家慶、子だくさんで有名な十一代家斉の次男だ。生姜が好物で、食卓にあがっていないと激怒したというエピソードが知られている。

政治の実権は老中の阿部正弘が握っていた。阿部正弘は二十五歳にして老中の地位をつ

かんだ俊英で、勝海舟かつかいしゅうをはじめとするすぐれた人材を多く見出したが、八方美人な性格で積極的な政策をおこないえなかった。みんなの意見を聞いて決めようとして妥協をくりかえし、みんなに不満を抱かせるタイプである。

嘉永年間を生きる人には、変革の足音が聞こえていたかもしれない。

幕府の成立から約二百五十年が経ち、強力な体制にもほころびが生じていた。幕府や諸藩の財政は危機に瀕し、天候不順による飢饉もあって、民心も悪化していた。大坂の街を襲った大塩平八郎おおしおへいはちろうの乱は天保八年（西暦一八三七年）だから、それほど昔のことではない。これらに対応するため、体制の引き締めを図った天保の改革が失敗に終わる一方、薩摩藩さつまや長州藩は藩政改革に成功しており、力をたくわえつつあった。

また、外からの圧力も高まっていた。欧米諸国がアジアに進出し、植民地をめぐる争っていた時代である。十九世紀のはじめごろから、日本近海でアメリカ、イギリス、ロシアといった外国の船が見られるようになり、貿易をもとめる使者もやってきた。外国との貿易を制限する、いわゆる鎖国政策を守ろうとする幕府は、異国船打払令を出して、外国船を追い払うよう命じた。

しかし、ふたつの事件が、その意図をくじく。

ひとつが天保八年（西暦一八三七年）のモリソン号事件。浦賀うらがに現れた外国船モリソン号に対し、沿岸警備の砲台が砲撃をかけたのだが、後に、モリソン号は日本人の漂流民を護送してきた商船だったことがわかり、大問題になった。もちろん、漂流民を送ってきたほうにも打算があっただろうが、事情も聞かずに攻撃をしかけるのは文明国のやり方ではない。

もうひとつが、西暦一八四〇年にはじまった清しんとイギリスの戦い、アヘン戦争である。清というのは日本から見れば大国だ。それが、有利な貿易をしたいという身勝手な理由で戦争を起こされ、惨敗したのだ。アヘン戦争の情報はすぐに日本にもたらされ、幕府に大きな衝撃と恐怖を与えた。

次の標的は日本かもしれない。欧米諸国を怒らせたなら、圧倒的な武力で攻めてくるだろう。幕府はあわてて、異国船打払令を撤回する。

そして、嘉永六年（西暦一八五三年）、浅子が数えて五歳の年に、黒船が来航する。幕末のはじまりであった。

第二章 幕末の動乱と浅子の輿入れ

花嫁稼業は嫌い

三井家で育った少女時代について、浅子は次のように述懐している。

「……其頃は女子の教育は只だ琴と三味線と習字位のものでした。そうして少し年を取ると、裁縫を専らにします。然るに、私は随分御転婆でした。否余程御転婆でしたから、私はそう云ふ稽古は皆嫌ひでした……」(『日本女子大学校学報1』「余と本校との関係を述べて生徒諸子に告ぐ」)

富裕な商家のお嬢様として、浅子はそれにふさわしい教育を受けていた。琴に三味線に習字、それから裁縫と、いわゆる花嫁修業である。逆



思ひ出の邸及及び居室



油小路出水三井家の門。現在では同家の跡地はホテルとなり、当時を偲ぶよすがはないが、三井文庫より屋敷の図面が発見されている。研究が進めば、浅子がどの部屋で暮らしていたのか、明らかになるかもしれない。 出典：三井寿天子追悼文集「雪の香」

に、男子は基本的な読み書き算盤そろばんをはじめ、古典などの教養を身につけるよう求められる。儒教じゆきようの影響が強く、男女の別を重視する当時では、当たり前のことだった。

三井家は家訓として儉約、勤勉を尊び、浪費や遊蕩ゆうとうを嫌う。店の資本と家の財産を分けて考え、無駄遣いや遊興ゆうきよう費の借金には毅然とした態度でのぞんでいる。ゆえに、子供に対しても甘やかすことはなく、教育は厳しかった。呉服屋なのに、流行の衣服を着せることもなかったというから、徹底している。

浅子は女の子らしい習い事が嫌いだったという。しかし、負けず嫌いの性格ゆえ、怠けることはなかったと思われる。大人になってからの評価では、書は得意だし、暇をみては裁縫で手を動かしていたというから、興味がなくてもしっかりと習得していたのだ。

勉強好きでおてんばなお嬢様

嫌いなお稽古の代わりに、おてんばな浅子が熱中したのが相撲や勉強だった。相撲と勉強はかけ離れている？ いや、ともに男子のやることという共通点があった。

当時、出水三井家には、一歳年下の義理の甥たかかけ（次期当主の高景）をはじめとして、従兄弟など同年代の男子が何人かいた。

これには少々事情がある。幕末の京都には全国から藩士がのぼってきており、住居が不足がちだった。有力な商人はそうした者に自分の屋敷を貸し、広い本家に親戚一同が集まって暮らしていた。だから、浅子は男子たちの受ける講義をこっそり聴いたり、書物を借りて読んだりして、勉強することができたのだ。

浅子が夢中になったのは、「四書五経」と呼ばれる儒教の経書である。四書は『大学』『中庸』『論語』『孟子』の四つ、五経は『書経』『易経』『詩経』『礼記』『春秋』の五つで、孔子や孟子といった儒家の教えを記したものだ。これらは中国の官吏登用試験にあたる科挙の科目にあつたことから、知識人にとっては必須の教養となり、日本でも広まった。儒教の教えが、封建制の身分秩序を守るのに都合がよかつたためでもある。

ただ、儒教そのものが浅子の興味を引いたとは思えない。とにかく本が読みたかつたのではないか。『論語』『孟子』などは思想と関係なく、ただ格言やエピソードを読んでも楽しめるものである。

「学びて思わざれば、すなわちくらし。思いて学ばざれば、すなわちあやうし」

「故きを温ねて新しきを知れば、もって師となるべし」

「己の欲せざるどころ、人にはどこすなかれ」

『論語』の数々の名言は若い浅子の心に響いただろう。

しかし、女に学問など必要な

い、というのが当時の風潮である。回想によれば十三のとき、

浅子は読書を禁じられてしまった。だが、浅子ならば、こっそり読んでいたのではないか。

あれをするな、これをするな、おしとやかにしろ、女の子らしくしろ、そう言われつづけるストレスが、体を動かす方向に向かったのかもしれない。

同時代の浅子の評伝によれば、

<p>論語朱熹集註</p>	<p>學而第一</p>	<p>子曰く習して而して</p>	<p>時に之を習ふ亦悦びて</p>	<p>朋有遠方自來亦樂</p>	<p>人知不而して恤ぶ</p>	<p>不亦君子なり不乎</p>
<p>論語朱熹集註 一之卷</p>	<p>學而第一 <small>本文「學而」の二字あるを以て篇の</small></p>	<p>子曰く習して而して <small>子言はせて聖人の御話なり以下此例とある一を學問の道更くかくさる</small></p>	<p>時に之を習ふ亦悦びて <small>このべし習ふ字この心のよし時といふも時くめとてはやく二六時中平</small></p>	<p>有朋自遠方來不亦樂乎 <small>凡て善しも悪しも類を以て展とかなし朋友たがひて徳とを以て相あつた</small></p>	<p>人不知而不愠不亦君子乎 <small>論なるべし人不知而不愠不亦君子乎 凡て善しも悪しも類を以て展とかなし朋友たがひて徳とを以て相あつた</small></p>	<p>論語</p>

江戸期に広く読まれた『經典余子』の『論語』。浅子が独学に近い形で四書などを読んだとすれば、このようになかで読み方が記された初学者向けのものであったのではないだろうか。

次のとおりである。

「……時とすると又丁稚や小僧を相手に相撲を取つて、結立ゆひたての雲鬚束うんびんつかの間に滅茶滅茶に振り乱すといふ始末、『もう十四にお成りじやありませんか、少しは御氣を附けなさい』と、母上より小言を受けることは毎日の様であつた」(『実業之日本』第七卷二号)

「本邦実業界の女傑 (二二)」

髪を振り乱して、店の小僧と相撲をとるなど、おてんばにもほどがある。テレビなどない時代、相撲はスポーツや国技というより、興行としての意味合いが強いものだから、なおさらまずい。親たちは頭を抱えていただろう。お嬢様の相撲の相手をさせられる小僧さんもかわいそうだ。

だが、周りの大人たちは、浅子を納得させることができなかつた。次のようなやりとりが想像できる。

「相撲などやめなさい」

「どうして?」

「女の子だからです」

「どうして女の子はいけないの？ 女相撲だってあるじゃない」

「身分がちがいます」

「どうして身分がちがうといけないの？」

「どうしてって……そう、せっかく整えた髪が乱れるでしょう」

「……わかったわ」

翌日、事件は起こった。

「……浅子がなかなか起きてこない、いつも早起だのに今日に限って臥床ふしどを出ないのは、病気ででもあるのかと皆な氣遣つて居おつた處ところ、暫く経しばらつて起出た姿を見ると、此こは如何に、房々ふさふさと艶つややかであつた島田髻まげを、



18世紀末頃の相撲絵。勝川春章画。相撲は非常に人気のある娯楽であった。

惜気をしげもなく根元から切棄きりすててぬつと起きてきたのであった。母上は吃驚びつくりして『まあ其髪は……』といひ懸けると浅子は平気で『これで母様の御小言もなくなつたでしょう』と何處までも男勝りの言訳、人々聴て二度吃驚びつくりり、『驚いたお嬢様だ』(「本邦

実業界の女傑 (11)

叱られた浅子は、自分で髪を切ってしまったのだ。まさに反抗期である。

当時の若い女性の髪は、長く伸ばして島田髻を結うのが一般的だった。髻を折り返して、頭の上で形をととのえるものである。結婚式で見られる文金高島田ぶんきんたかしまだはその豪華版だ。

ざっくりと切ってしまうと、ふたたび島田が結えるようになるまで、かなりの時間がかかる。大人たちの衝撃の大きさがしのげよう。

しかし、この相撲と断髪のエピソード、まるで間近で見ているような記述だが、はたして実際にあつたのだろうか。

浅子自身はお稽古嫌いの勉強好きで、おてんばだったと語っているが、相撲については何も言っていない。そもそも、晩年になるまでは自分の過去をあまり話したがらなかつたという。過去の苦勞話をするよりは、政治経済について議論するのが好きだったそうだ。

引用した雑誌記事は、浅子が五十六歳のとき、明治三十七年（西暦一九〇四年）発表で、功成り名を遂げた浅子を好意的に紹介するものだから、まったく事実無根ということもあるまい。少なくとも、そういう噂なり伝説なりはあったのだろう。そして、浅子のひととなりやイメージにぴったりだったので、信じられたのではないか。

風雲渦巻く

自由奔放な浅子に、親や親戚はずいぶんと手を焼いたことだろう。しかし、当時の状況では、浅子ひとりにかかざらわっている暇はなかった。三井家の商売どころか、日本全体が未曾有の危機にさらされていたのである。

まず、黒船来航以降の流れを大まかにまとめてみよう。

嘉永六年（西暦一八五三年、浅子五歳）

ペリーひきいる黒船艦隊が浦賀に来航。

アメリカが幕府に開国を迫る。

嘉永七年（西暦一八五四年、浅子六歳）

日米和親条約締結。下田と箱館を開港。

安政五年（西暦一八五八年、浅子十歳）

日米修好通商条約締結。自由貿易開始。

安政七年（西暦一八六〇年、浅子十二歳）

関税自主権がなく、治外法権を認める不
平等条約。

安政の大獄。大老井伊直弼が反対派を弾
圧。

桜田門外の変。井伊直弼が尊王攘夷派の
水戸藩士らによって暗殺される。

桜田門外の変で、幕政の乱れは頂点に達した。

幕府を倒して天皇中心の政権をつくるのか（倒

幕・尊王）、公武合体などの手段で幕府を守るの

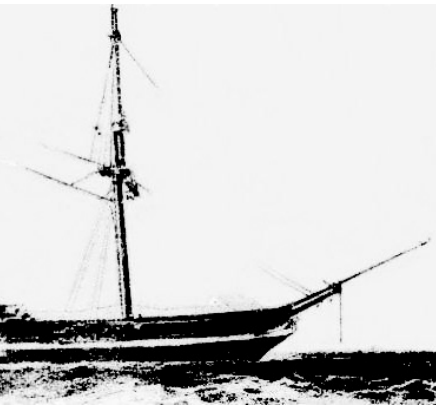
か（佐幕）。また、国を開いて外国との貿易をお

こなうか（開国）、外国を追い払って鎖国をつら

ぬくか（攘夷）。改革で力をつけた諸藩は、独自

の考えで動きだした。

幕府は外国の圧力に屈して開国政策を進め、

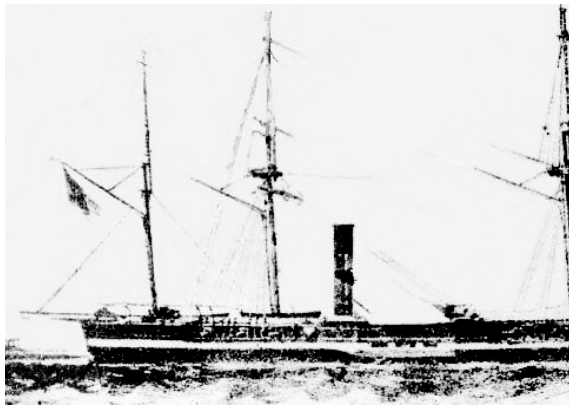


貿易の利益を独占しようとしていた。これに對抗するのが尊王攘夷派で、当初は朝廷の権威を尊重するよう求めていただけだったが、やがてはつきりと倒幕の旗をかかげることになる。

幕府は江戸にあるが、天皇の御座所ござしよは京都である。尊王攘夷派が京都を拠点とするのは当然だ。そして、これと対立する勢力も京都に集まってくる。動乱の舞台は、江戸から京都に移りつつあった。

三井家のような商家にとっては、迷惑きわまらない状況だ。親戚が集まってきて屋敷が狭くなるくらいはよいが、治安が悪くなり、財布の紐も締まって、商売はまちがいなくやりにくくなる。

突然の開国は、政治と同様に、経済にも深刻な影響を与えた。当時の日本は後進国であるから、原材料を輸出して、工業製品を輸入する貿易構造になる。生糸輸出きいとが好調で、当



ペリー艦隊の一隻、蒸気外輪フリゲート艦ミシシッピ号。
黒船を一目見ようと、浦賀は見物人でいっぱいになった。

初の貿易収支は黒字だったが、国内需要を無視して輸出を優先したため、物価が著しく上昇した。

また、いびつな金銀の交換レートはさらに問題だった。外国の商人は、海外貨幣↓日本銀貨↓日本金貨↓海外貨幣と両替するだけで、大きな利益を手にすることができた。小判はつぶして地金にして海外に持ち出され、金の流出が進んでいく。

生系の高騰と品不足によって、越後屋呉服店は大きな打撃を受けた。両替業も難しい舵取りを迫られただろう。しかし、それ以上に、政治の行く末が心配だった。幕府が存続するのか、それとも幕府が倒れて新しい政府が成立するのか。三井家は江戸や京都で懸命に情報収集と分析をおこなっていた。

都が炎の海に

京都においては、めまぐるしく状況が変わっていく。

ぶんきゆう
文久二年（西暦一八六二年、浅子十四歳）

ぶんきゆう
文久三年（西暦一八六三年、浅子十五歳）

あいつ
会津藩主松平容保が京都守護職に就任。

下関事件で長州藩が、薩英戦争で薩摩藩

が攘夷を実行するも、彼我の実力差に衝撃を受ける。

八月十八日の政変。同盟した会津藩と薩摩藩らによって、長州藩ら尊王攘夷派が京都から追い出される。

池田屋事件。池田屋に潜伏していた尊王攘夷派志士を新選組が襲撃。

禁門の変。長州藩兵が京都で兵をあげ、会津藩、薩摩藩らの軍に鎮圧される。

この三年、京都は混乱の極にあった。尊王攘夷派の過激な志士と、新選組をはじめとする佐幕派の組織が、街中で斬り合ったり、仲間割れしたりしており、挙げ句の果てに藩同士の間で市街戦が起こったのである。それらに巻きこまれて、尊王も佐幕も関係ない一般の民も多くが犠牲になっている。

なかでも、禁門の変（蛤御門の変）は大砲や鉄砲が撃ちかわされる本格的な戦であり、

元治元年（西暦一八六四年、浅子十六歳）

戦闘は一日で終わったが、勝者も敗者も火を放ったため、大火事が生じた。二日間にわたって燃えつづけた炎は京の都を席捲し、三万戸に迫る家々や寺社が焼け落ちた。

都の人々が戦を身近に感じたのは、大坂の陣以来、ほぼ二百五十年ぶりである。

富裕な商家の子供たちが外で遊べるような環境ではなかっただろう。殺伐とした雰囲気は町人の心もすさませる。店の先行きも不安で、大人たちもぴりぴりとしていたにちがいない。

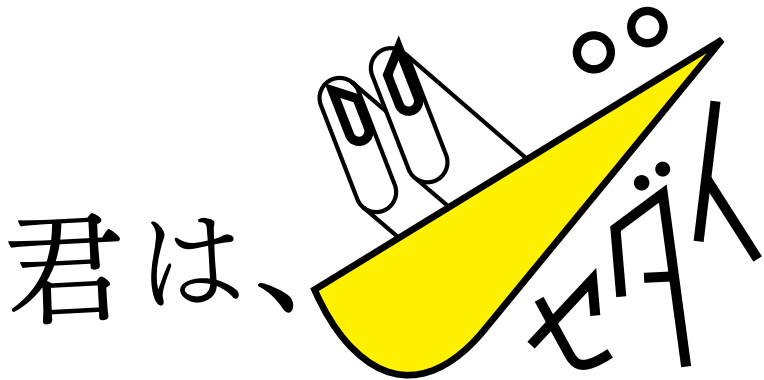
浅子が跳ねっ返りな少女時代を過ごしたのは、そういう場所なのだ。勉強と相撲に夢中になっていたという話も、時代背景とからめて理解すべきだろう。

地図を見ればわかるとおり、浅子の住んでいた油小路出水の屋敷は御所の西側で、禁門にほど近い。禁門の変の砲声ははっきりと聞こえていたはずである。兵士たちの喊声も耳にとどき、街を焼く炎も目に入ったことだろう。まさに時代の変革を目撃していたわけである。この経験は、浅子にとって人生の土台となったのではないか。

八月十八日の政変から禁門の変にいたる過程で、尊王攘夷運動は壊滅的な打撃を受けた。第一次長州征伐で長州藩は屈服し、幕府は命脈を保ったかに思われた。

翌元治二年、改元して慶応元年、京都に東の間の平穏が訪れた。それゆえかもしれない。

浅子はかねてからの約束通り、加島屋に輿入れすることになる。



君は、

ゼダイ人

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ
ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

会いに行ける編集長

毎週「つながる」毎月「会いに行ける」。新書出版を目指す新人と編集者による「知の格闘」を生放送！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!